

日本社会心理学会  
2014 夏合宿セミナーのしおり

2014年8月29日（金）～30日（土）

八王子セミナーハウス

# スケジュール

## 【8月29日（金）】

- 12：00～13：00 集合・参加受付（長期館セミナー室 B）
- 13：00～13：15 開会挨拶・合宿説明（長期館セミナー室 B）
- 13：15～14：45 招待講演 1（長期館セミナー室 B）  
村山 航 先生（University of Reading）
- 14：45～15：15 宿泊室チェックイン（国際館・松下館・本館）  
部屋割りは p.7 参照
- 15：15～18：15 分科会セミナー1・2（国際館セミナー室 A～E）  
詳細は pp.9-10 参照
- 18：15～19：00 夕食（本館 4F 食堂）
- 19：00～20：15 入浴・休憩
- 20：15～21：00 委員会セッション（長期館セミナー室 B）
- 21：00～23：00 懇親会（長期館セミナー室 B）

## 【8月30日（土）】

- 8：00～ 9：00 朝食（本館 4F 食堂）・チェックアウト
- 9：00～10：30 招待講演 2（長期館セミナー室 B）  
榊 美知子 先生（University of Reading）
- 10：45～12：15 分科会セミナー3（国際館セミナー室 A～E）  
詳細は p.11 参照
- 12：15～13：00 昼食・閉会挨拶（本館 4F 食堂）

# 招待講演

村山航 (University of Reading)

タイトル：人間の動機づけに対するマルチメソッドアプローチ

要旨：このトークでは、私が人間における動機づけ（特に動機づけと学習の関係）を理解するために実施した実証研究を、なぜそういった研究を行ったかという個人的な文脈も含めて、総括的に話したいと思います。動機づけは人間を理解する上で重要な概念ですが、同時に曖昧な概念でもあります。こうした動機づけ研究の難しさを解決するために、私は調査・実験・脳イメージング・メタ分析、数理モデルといったさまざまなアプローチを組み合わせて使うというスタンスを取ってきました。心理学におけるこうしたマルチメソッドアプローチの重要性について、特に焦点を当てながら話を展開していきたいと思います。

榊美知子 (University of Reading)

タイトル：感情が認知的処理に与える影響

要旨：「うれしい」「楽しい」「悲しい」といった感情が認知的処理に影響を与えることは広く知られています。日常生活において、「うれしくて何も手につかない」「緊張して頭が真っ白だ」といった表現が多用されることから、感情が認知に影響を与えるのは自明のことのように思われるでしょう。しかし、その影響の具体的な様相は十分に明らかになっていないとはいえません。今回の発表では、感情が認知的処理にどのような影響を与えるのか、行動実験やMRI実験など、私自身の行ってきたさまざまな研究を紹介します。

## 分科会セミナーの手引

セミナーの目的は、議論をすることです。そのため学会の口頭発表やワークショップ、院生リーグとは全く異なる形式で実施します。発表者の中にはこの形式に馴染みがなく、面食らう方もいるでしょう。そこで事前に十分な準備と心構えをしてもらうために、セミナーでの発表について、特に留意すべき点を説明します。

### 『発表』と『質疑応答』の時間を明確に分離しません

あなたの発表が始まった瞬間から、質問が飛び出します。しかもあなたとは理論的背景を共有しない人々から。そのためゼミ発表とも学会発表とも違い、慣れてない人には、非常にイラつく展開となることでしょう。

質問ばかり出てきて、発表はなかなか先に進まないこともあります。「どうしてこんな当たり前のことばかり質問してくるのか。私はもっとこの先にある話をしたいのだ。こんな入り口部分で止まらないで欲しい」と感じることもあるでしょう。

しかし、入り口で多くの質問が出てくるということは、あなたが持つ「研究における暗黙の前提」が自明ではないことを意味します。「自分にとっての当たり前」が通じない人たちに自分の話を伝えること。これは学術の世界を生き抜いていく上で最も重要な能力です。「どうしてこの人は自分の話を理解してくれないのだ」と怒っていたら、いつまで経っても自分の小さな世界から抜け出すことなどできません。

### あなたが望まない質問やコメントも数多く出てきます

「研究を進める上で役に立つ有益なコメントをもらいたい」と考える発表者は多いでしょう。しかし、議論というものは、自分の研究の欠点が暴かれる場でもあります。「揺らぎようがない前提」だと思っていたものが、そもそも間違いであったと思い知らされることすらあります。最悪の場合、全てが否定されて、自分の研究は無意味なものだと感じながらセッションが終わるかも知れません。

しかし、議論とはそういうものです。

否定されたならば、そこから新たに積み上げていけば良いだけです。ディスカッションも人間です。間違えることもあります。ディスカッションからネガティブなコメントが出てきたとしても、そこであなたの全てが終わる訳ではありません。自分が思い描いたのとは違う形でセッションが終わっても、気を落とさずに。どんな焼け野原にも、必ず若葉が芽生えてきます。

## **司会進行は建設的な議論を進めるモデレーター**

新規事業委員のメンバーが司会として参加し、出来る限り建設的に議論が進むよう仲介をしていきます。議論が堂々巡りに陥った場合や、先に進んだ方が建設的だと判断した場合、途中で議論を打ち切って発表を促します。他方で、ディスカッサント同士で議論が始まった場合、それが有益な議論であると判断する限り、止めることはありません。

## **発表時間は40～50分程度を目安に。スライドは付録を多めに準備**

発表スライド投影用の機器（パソコン・プロジェクター・スクリーン）を準備します（パソコンの OS は Windows 7、アプリケーションは Power Point 2013 を搭載）。

移動時間があるため、一人あたりの持ち時間は80分とします。「それなら60分は話せるだろう」と考えるかも知れません。しかし、発表よりも議論に多くの時間が費やされるのが普通なので、長くても40～50分を目安にスライドを用意するのが良いでしょう。

実験や分析の詳細については、付録として余計にスライドを作成しておくことを薦めます。細部に関する質問が出てきたら、必要に応じて付録スライドを見せて答えればスムーズに進むでしょう。

義務ではありませんが、発表時にスライドを印刷して資料として配布することを強く薦めます。ディスカッサントが全体の流れを見通しながら、質問やコメントを組み立てることができる上に、どのタイミングで質問をすれば良いのかを計算できるからです。スライドを配布することで、瑣末な部分で議論が足踏みするリスクを回避できます。ただし会場で印刷することはできません。配布する場合、事前に用意、持参してください。

## **発表者以外の皆さんへ**

分科会セミナーは3つの時間帯があり、各時間帯で5つのセッションが同時に開催されます（詳細は11～13ページ）。セミナー番号の数字は時間帯、英字は場所を表しています（「1-A」は、時間帯1、会場がセミナー室Aという意味です）。原則、希望のセッションに自由に参加できますが、部屋のキャパシティなどの事情により、希望のセッションに参加できない可能性もあります。

なお参加者のみなさんも、ディスカッサントと同様に質疑応答や議論に自由に加わってください。「自分の質問やコメントに意味がないのではないか」と恐れる必要はありません。発表者とディスカッサントの発言を優先すべきだと判断する場合は、司会者がその旨の指示を出します。言いたいことがあるならば、まずは発言してみてください。

## **最後に**

発表と質疑応答が明確に区分されない形式は、欧米の大学のコロキウムではよく見られま

すし、国内でも決して珍しいものではありません。しかし初めてこの形式で発表する人の中には、自分の全てを否定されたと感じて落ち込んだり、最後まで話をさせてもらえないことに強い不快感を感じる人が出てくるのも事実です。この手引は、この形式の下で発生しうる最悪なケースを想定して書かれています。しかし、実際のセミナーはもう少し和やかに進行し、また火の手があがるとしても一部延焼で終わるでしょう。それでも最悪の事態を想定しておけば、普段と違う形で発表が進んでも、動揺することなく建設的に議論を進めることができます。これは、そのための手引に過ぎません。皆さんと鋭いながらも楽しく建設的な議論ができることを、楽しみにしています。

## 委員会セッション「海外に行こう！」

招聘講師をはじめとして、今回の合宿には、留学やポストクなど、様々な形で海外に長期研究滞在した経験を持つ人が数多く参加しています。初日夜の懇親会の前に、「海外に行こう！」と題する委員会セッションを開催します。そして海外へ研究滞在することのメリットや、どうやって最初の一步を踏み出したのかなどを、何人かの経験者に自らの体験談を語ってもらいます。

発表者は現在交渉中ですが、最後のトリとして竹村幸佑さんが「月刊ポストク（コミケ86で販売予定の同人誌）」に寄稿されたエッセイに基づくお話をしてくださります。

懇親会の前座として、お酒なども入りながらリラックスした雰囲気の中で進めていく予定です。

# 分科会セミナー プログラム

分科会セミナー1		
1-A	先制攻撃ゲームを用いた外集団攻撃の測定	
発表者	三船恒裕	外集団に対する攻撃行動は内集団への協力行動よりも生じにくいことが知られているが、外集団攻撃に特化した心理メカニズムの探索はあまり進んでいない。本研究の目的は「相手が攻撃して来るのを防ぐために攻撃する」という先制攻撃行動を測定するゲームを用い、外集団への攻撃行動の生起メカニズムを探ることにある。ただし、まだ実験案段階であり、データは無いことをご了承いただきたい。
ディスカッサント	平石界 三浦麻子	
司会進行	藤島喜嗣	
1-B	選択肢の分け方が世論調査の回答に与える影響：集団的自衛権行使の世論をめぐる自然実験と統制実験	
発表者	山田歩	多肢選択型の質問で使用する選択肢は、より大きな単位のグループにまとめたり、より小さな単位の選択肢に分割したりできることがある。例えば、ある社会的問題の賛否を問う場合、「選択肢A・選択肢B」の選択肢セットを用意することもできるが（“賛成”・“反対”）、選択肢Aを分割し、「A1・A2・B」の選択肢セットを用意することも可能だろう（“○なら賛成”・“△なら賛成”・“反対”）。本研究では、こうした選択肢の分割が、集団的自衛権の行使に関する世論調査の結果を大きく左右していることを自然実験と統制実験の二つから示す。
ディスカッサント	榑美知子 石黒格	
司会進行	稲増一憲	
1-C	動機づけの内在化を支える心理メカニズム	
発表者	後藤崇志	自己決定理論(Ryan & Deci, 2000)は、社会生活における人の動機づけのあり方を理解し、実践応用の提供に貢献する有力な動機づけ理論のひとつである。しかしながら理論上で仮定される現象を支えるメカニズムには曖昧な部分も多く、内在化と呼ばれる自律的動機づけの獲得過程もそのひとつである。発表者自身の研究成果や国内外の研究知見をもとに、動機づけの内在化を支える心理メカニズムについて考察する。
ディスカッサント	村山航 石井敬子	
司会進行	大江朋子 竹澤正哲	
1-D	資源の分割容易性と分配への期待が妬みに及ぼす影響	
発表者	井上裕珠	妬みは良くない感情と考えられているが、それにも関わらず私たちはなぜ妬んでしまうのだろうか。本研究では妬みの適応的機能、具体的には妬みが資源分配場面において有益であった可能性に焦点を当て、妬みの程度は資源の性質と他者からの分配の期待に依存すると予測する。この予測を実証的に検討するために3つの実験を実施した結果、他者が分割容易な資源を持ち、かつその相手からの分配が期待できない場合に妬みが特に強まることが示された。本研究の意義や限界、今後の研究の可能性を議論する。
ディスカッサント	大坪庸介 樋口匡貴	
司会進行	橋本剛	
1-E	協力的な人間関係を構築可能な評判生成規範	
発表者	鈴木貴久	社会的交換における評判利用の効果を検討した先行研究では、評判を生成する際の規範が協力率を維持可能かどうかに関与していることが示されている。本研究では、より多くの相手と協力関係を構築するために有効な評判生成規範を検討する。具体的には、社会的交換における協力率と社会的ネットワーク構造の2つの要因に対する評判生成規範の効果について、計算機シミュレーション・社会調査・参加者実験の複数の手法を用いて検証している。
ディスカッサント	清成透子 竹村幸祐	
司会進行	清水裕士	

分科会セミナー2		
2-A	解釈の抽象度に応じた対人認知の変動過程の検討	
発表者	伊藤 言	他者のある行為についての心理学的理解は、意図・信念・動機についての理解(メンタライジング)にもとづく抽象的解釈と、行為の過程や動作についての理解(シミュレーションにもとづく具体的解釈)の2つで成り立っている。本発表では、解釈の抽象度と対人認知の関係を扱ってきた解釈レベル理論(Trope & Liberman, 2010)を批判的に検討することを通じて、解釈の抽象度に応じた対人認知の変動過程について議論を行いたい。抽象/具体の二分法的比較研究の限界、解釈の抽象度と心理的距離の心理学的帰結は異なることを中心に議論する。
ディスカッサント	榊美知子 竹村幸祐	
司会進行	石井辰典 竹澤正哲	
2-B	個人が獲得した知識と集合知の関係性	
発表者	中分遥	集合知とは、個人には達成できない認知的な課題が複数の人間によって達成される現象である。ただし、その成立範囲は限られており、個人の判断の独立性が保たれる(Surowiecki, 2008)、個人の能力分布が正規分布から大きく逸脱していない(Krause, Ruxton, Krause, 2011)といった条件が必要である。本セミナーでは、①人間が一般的に獲得している知識のみに基づいて独立に判断する場合、②試行錯誤学習によって知識を更新する場合の2つのケースに関して、多数の人間はどの個人も達成できないような高いパフォーマンスをあげるのか検討した研究を発表する。
ディスカッサント	村山航 平石界	
司会進行	清水裕士	
2-C	感謝表出が被表出者に及ぼす影響	
発表者	蔵永 瞳	われわれは、他者から親切にされたとき、感謝の気持ちを感じ、その気持ちを表出することがある。本研究は、感謝の表出が被表出者(親切をした人)に及ぼす影響について検討を行ったものである。今回の発表では、これまで実施してきた3つの研究結果について報告を行う。具体的には、感謝表出の形態に関する調査研究(研究1)、感謝表出を受けた後の認知・感情に関する調査研究(研究2)、感謝表出を受けた後の行動に関する実験研究(研究3)の結果について報告する。
ディスカッサント	石井敬子 大坪庸介	
司会進行	藤島喜嗣	
2-D	大学のソーシャル・キャピタルと学生の適応に関する研究	
発表者	芳賀道匡	ソーシャル・キャピタル(社会関係資本; 以下SC)は、ある集団や社会環境において、メンバー間で蓄え共有している心理社会的資源である。SCは一般成人や児童青年の適応指標との関連が先行研究で示されている。本研究では、大学キャンパスをコミュニティと捉え、①学生が認知しているSCの尺度開発と信頼性・妥当性の検討、②大学のSCと学生の適応の関連、について検討したので報告する。
ディスカッサント	石黒格 三浦麻子	
司会進行	橋本剛	
2-E	物語に関するスキーマが没入経験に及ぼす影響	
発表者	福田怜生	ストーリー広告に対して没入することで説得効果が高まることが指摘されている。これは、批判的な思考を抑制したり、登場人物に共感したり、ストーリー内容を鮮明に想像したりすることに依る。説得効果を高めるために、没入を促進する多くの要因が示されている。しかし、促進する構造に関して統一的な見解は、なされていない。そこで本研究はこれらの課題を解決するために、ストーリー内で描かれる状況に関するスキーマに着目して実験を行った。本発表では、これらの内容を状況モデルの知見から説明する。
ディスカッサント	清成透子 樋口匡貴	
司会進行	稲増一憲 大江朋子	

※2-Eセッションはやむを得ない事情によって発表者が合宿に参加できなくなりキャンセルになりました。



分科会セミナー3		
3-A	集団規範の伝承と淘汰	
発表者	尾関美喜	社会心理学の集団規範を扱う研究では、規範は所与のものとして扱われることが多かった。しかし、集団規範は、実際には集団内で安定的に存在するわけではなく、集団成員の入れ替わりを経て、形を変えて継承されたり、形骸化されたり廃止されたりすることもありうる(山田, 2012)。そこで今回は、まずは大学生の実習授業グループを対象にした予備調査の結果をもとに、集団規範の内容を整理し、どのような種類の規範が時間とともに変化しうる可能性があるのかを探索的に検討する。
ディスカッサント	清成透子 三浦麻子	
司会進行	清水裕士 竹澤正哲	
3-B	風評被害に関する心理学の知見を応用した多面的研究	
発表者	工藤大介	東日本大震災に伴い発生した風評被害と呼ばれる買い控え現象について、その発生メカニズムを個人の心理的要因・判断過程に着目し明らかにする。また、風評被害を抑制するためにはどのような方略をとればよいのか、説得的コミュニケーションの理論を応用し、効果的なメッセージ提示について検討を行う。そして、得られた知見を科学コミュニケーション一般へと応用し、特に非常時における情報提示の在り方について議論していく。
ディスカッサント	石井敬子 樋口匡貴	
司会進行	稲増一憲	
3-C	連結ルールを持つ人の適応価の検討	
発表者	稲葉美里	集団における協力を達成可能とするための仕組みの一つとして、本研究では連結に着目する。連結とは、複数のドメイン間にまたがる行動決定のルールが採用されている状態を言う。集団に非協力的に振る舞う人を他の交換関係から排除するという連結ルールによって、協力状態が維持されることが実験室実験によって示されている。本研究では、実験室実験の結果を基に、人間がこのような行動決定ルールを採用することを説明するモデルを、ゲーム理論および進化ゲーム理論のアプローチから検討する。
ディスカッサント	石黒格 平石界	
司会進行	藤島喜嗣	
3-D	相手への共感が罪悪感の経験に与える影響	
発表者	八木彩乃	謝罪を導く情動要因としてあげられる罪悪感(e.g., Tangney & Dearing, 2002)、その経験に共感が重要な役割をはたすことが指摘されている(e.g., Hoffman, 1998)。Howellら(2012)は質問紙調査により特性としての共感および罪悪感が謝罪傾向を予測することを示したが、葛藤状況での共感と罪悪感の関係の検討には至らず、これらの関係は依然として不明瞭なままである。本研究では、相手に対する共感が過失後に経験される罪悪感へ影響を与えると予測し、その検証を試みる。
ディスカッサント	榊美知子 村山航	
司会進行	石井辰典	
3-E	なぜ間接的に頼むのか、なぜ直接的に頼まないのか: 友人の査定、行為のコミットメントの観点から	
発表者	平川真	われわれは、発話に要求内容を含めずに、自分が困っている状態にあることを表明することで頼むことがある。これを間接的要求といい、日本社会ではよく使用されると考えられている。本発表では、間接的要求を使用する理由、そして使用の文化差が生じる理由について、友人の査定という観点から説明する。また、友人の査定とは別に、相手の行為を指示することが持つ社会的な意味と行為のコミットメントという観点からの新しい理路を展開する。
ディスカッサント	大坪庸介 竹村幸祐	
司会進行	橋本剛	